

中学入試分析をより一般化するために —「中学入試情報セミナー」資料活用法—

関西国際大学 客員教授
神戸山手女子中学校高等学校 校長

平井正朗



ある有名塾の先生が、「関西の中学入試結果の総括」といえば、メリック教育システムのスタートアップセミナーから始まり、日能研の私学経営セミナー、そしてエデュケーション・ネットワーク（EN）の中学入試情報セミナーが恒例行事。そこから1年が始まる」と形容されていたことを思い出す。

関西の私立中学が盛り上がったとはいえず、実際の進学者は小6全児童の約10%、つまり10人に1人しか進学しない。高校入試や大学入試と比べるとマーケットには限りがあり、かなり「特殊」な分野なのだ。その意味で、学習塾や教育関連企業が時間をかけて収集したデータは、次年度の入試広報戦略を検討する上で貴重な資料となる。参加者はひと言も聞き逃すまいと真剣そのもの。自校の話題が出てきたときは嬉しいのが本音だ。それに加え、他校や学習塾の先生方とお会いできるのも楽しみのひとつである。

しかしこの度、毎年4月と9月に会場を借りて20年以上続けられてきたENの「中学入試情報セミナー」が終了し、今後は異なる形で情報発信することのこと。時の流れを感じざるを得ない。どのセミナーでも配布される資料は、それぞれ特徴があり有益なものばかりだが、ENのものは、地区別受験率推移と入試結果、男女別・入試日程別志願者動向、学校別・コース別定員充足状況、次年度の入試情報など、データの緻密さという点では特筆に値する。コロナ禍でオンラインによるセミナー参加が日常化しているにもかかわらず、会場が満員になるのは話者である藤川享氏の客観性を重視したソフトな語り口に他ならない。同時に、マクロな視点とミクロな視点からのアプローチは、自校の状況に合わせた分析と対策を可能にしてくれる。

ここで今後の実践的活用法を考えると、これまではナビゲーター役がいたため、入試担当者が会場に出向くOJET（Off the Job Training）が主流であった。その意味で、対面での入試分析を聴くことができるのは限られた者だけであり、中学入試といえば「職人芸」のようなどころがあったのもまた事実。しかし今後は、作成されるであろう資料を参考に各校や各塾が情報を読み取り、精査しなければならぬ。「チーム学校」として広報戦略を検討

することが可能になる絶好のチャンスである。

勤務校では、年数回の研修の1回分を使い、資料を前もって提供し、テーマを与え、教員同士でディスカッションする時間を設け、協働して課題解決をする取り組みを行っている。限られた時間内で処理することになるため、み方はさまざまであるが、集中度を高めるだけでなく、タイムパフォーマンスになる。サポートが必要ならフィードバックや質疑応答を通じて理解を深めることもある。補足資料をつけることもしばしば。研修の成否は授業準備と同じなのである。大切にしていることは探究学習と同じ。各自が入試広報部員になったつもりで当事者意識を持ち、問題点を見つけ、5W1Hを策定することが第一歩。特に、Whyを説明する仮説、また、結果を記述するだけではなく、原因を特定するためのサーチャイトが不可欠であること、さらに筋道を立てて、解決への提案ができ、成果を共有できるようになるとカリキュラム・マネジメントの精度が上がる。今や情報活用のツールといえば、生成AIが代表だが、「何を学ぶのか」（WHAT）と「どのように使っていくのか」（HOW）を組み合わせたアクティブな取り組みが定着すれば、その相乗効果が学校の発展につながるのである。